

## 夏目漱石「夢十夜」「第三夜」における親性と子ども性の対決：場所論的夢解釈

荒木, 正見  
福岡女学院大学人文学部：教授

<https://hdl.handle.net/2324/1812235>

---

出版情報：比較思想論輯：比較思想学会福岡支部紀要．2，pp.11-24，2000-05-01．比較思想学会福岡支部  
バージョン：  
権利関係：



# 夏目漱石「夢十夜」「第三夜」における親性と子ども性の対決

## ―場所論的夢解釈―

荒木正見

小論は、夏目漱石「夢十夜」「第三夜」を夢として解釈する試みである。

この作品は、本来、小説であり、夢ではないというのが正当である。まず、夏目漱石自身が小説として発表している。小説家として創作方法を苦悶し続けた漱石が、小説を執筆するのに小説としての虚構をしないはずがない。その虚構については笹淵友一『夏目漱石―「夢十夜」論ほか―』で、「漱石が第三夜において企てたのは、怪談の中からこの不快な不純物(江戸末期から明治初年にかけての怪談物の持つ、官能に直接迫る恐怖感や不快感＝筆者註)を除き去り、官能よりも想像に豊かな余地を残したものを創造することだった」<sup>(1)</sup>と、具体的に述べられるくらい明確な意図さえ窺えるものである。また、仮に 誰かの夢としても、すべて漱石自身の夢だと断定するのは、特に注意を要する。たしかに後述するように、漱石がこのヒントを得た夢を見たという形跡もあるが、創作とは自己の体験をそのまま記述するものではないし、特に漱石は、例えば、「坊ちゃん」で、自分の友人と自分との体験をひとりの主人公に創りあげたり、森田草平の「煤煙」事件を「三四郎」に援用するなど、しばしば他人の経験や、他人の手紙をみずからの小説の材料に用いているからである。

このような常識的な理由から、夢そのものではないという事実を重視する研究者は当然ながら数多い。

例えば、『夏目漱石 ―「夢十夜」論ほか―』では、伊藤整・荒正人等がこれを夢と見立てて、キリスト教的原罪論やフロイト派精神分析の影響の強い分析を行ったのに対して、「作品の構想分析を抜きにした観念の移入」だとしてこれを退け、この「第三夜」の虚構を媒介したものは「近世末期から明治初期にかけての文学・演劇の様式としての怪談噺」と述べられ、それは「文学様式からすれば怪談噺の一コマであり」「世界観からすれば輪廻転生譚である」と、当時の芸術風潮の影響だとされている<sup>(2)</sup>。

また、相原和邦『『夢十夜』試論 ―第三夜の背景―』では、漱石が直接影響を受けたであろう日本の伝統文学や民話が丁寧に列記され、「盲殺し」「背負った子どもの石地藏への変身」「田圃という舞台」などの類比が述べられている<sup>(3)</sup>。

小論は、あえて夢として解釈するという試みであるが、後述するように、深層心理を読まなければならない夢解釈においても、特定の普遍的概念による単なる置き換えは危険なことである。最終的には、個的存在としての夢主の個の同一性をこそ明らかにしなければならないからである。その意味においては、これらの論文に示されるような、個人としての夏目漱石が直接影響されたであろう諸作品を明らかにすることこそが、重要な課題だといえる。

筆者はまずこの作品がこのような小説としての虚構に立つという前提で理解していることを確認しておく。

ところでまた一方で、小説という虚構の大きな枠の中で、他ならぬ漱石自身がこれを「夢」という枠組みにおいて記していることも事実である。以下の解釈の中で明らかになるように、この作品は漱石の優れた技法と、夢とはかくあるものだという直観的感性によって、一般的な夢特有の構造と普遍的意味を持ち、そこに反映される漱石自身を焦点とする時代

や社会を含む全存在を表現している。また、特にこの「第三夜」については、『夏目漱石 ―「夢十夜」論ほか―』でも、「明治38年1月15日、野間真綱宛て書簡」(自筆絵はがき)<sup>(4)</sup>を引用して、漱石が人殺しの悪夢を見たことに触れ、それが「第三夜の構想と無関係ではあるまい」<sup>(5)</sup>と推測されている。従って、これらのことから、まずは、夢解釈の方法を適用して解釈し、その上で改めて大枠としての小説とみなして論じるという段階をふむこともひとつの意義ある試みだといえる。

小論はそのような試みの中で特に、この作品を夢として解釈する点に焦点を合わせて紙幅を割り、大枠としての小説とみなして論じる点については、考察の方向性の一端に言及するにとどめる。

ところで、この「第三夜」は、場所がテーマに関わり、場所の移動と夢の深まりとが構造的に相関関係を為している。従って、解釈する場合の全体的な構成も、場所と場所移動の意味に着目することになる。そして小論では、このように場所に着目する方法的背景として西田幾多郎の場所論を適用するが、それを筆者なりに展開させて応用する。

また、内容を瞥見すれば、登場人物は、親と子の二人だけである。その二人の関係は、「対等だ」<sup>(6)</sup>と明記されるように、単純な親子の関係ではない。そればかりか、一種の気味悪さを感じさせる異様な関係である。小論では、作品のテーマの底に流れるであろうこの親と子の関係に特に着目して、解釈を遂行する。

以上のように小論は、哲学的場所論を軸として、心理学、文学などの比較論的考察の試みでもある。

なお、テキストは岩波書店版『漱石全集』(1993年-1999年)を使用する。

## 1. 場所の構造と夢の構造

### 1) 現象学的還元と構造的解釈・述語に基づく解釈

この作品を夢として捉えると、すべてが夢を見る人、夢主の主観的なイメージだと捉えるべきことは明らかである。従って、表現されるすべては、自覚するしないに関わらず、意識現象、すなわちこの場合は夢主の心像だと解さなければならない。それが、厳密にどのような構造を持つものかを考察する手がかりの一端は、フッサール(E. Husserl)の現象学的還元(die Phänomenologische Reduktion)という概念にある。筆者は、この概念と夢解釈との関係について「現象学的還元と夢解釈」<sup>(7)</sup>などですでに考察しているので、ここではその必要な要点をのみ述べる。

まず、現象学的還元とは「すべての超越的なもの(私に内在的に与えられていないもの)に無効だという符号をつけることであり、すなわち、その超越者の実在と妥当性をそのまま定立しないで、せいぜい妥当現象(Geltungsphänomen)として定立すること」<sup>(8)</sup>とされるように、すべての事柄をとりあえず、意識の地平に成立している現象として捉えるということである。これは上記のように、特に夢解釈に必要なことだといえる。この作品には、登場人物、場所など、さまざまな事柄が現われるが、それらすべてが夢主の心像だということのみで解釈しなければならない。

次に具体的な考察に関わるが、すべてを夢主の心像だというのは、総合的、全体的な解釈を要求されることを意味する。すべての事柄が意識の地平に成立しているということは、すべての事柄が因果関係をもっていることを意味する。従って、夢として現われる事柄は、夢主の肉体の殻に閉じ込められたものだけに影響されているわけではない。夢解釈に必要なその一端を後述するように、心身のさまざまなメカニズム、社会、歴史、そして、絶対

的な存在すべてが夢という現象に関与する。夢解釈において、それらを可能な限り解きほぐすことが求められる。

しかし、かといってなにもかもを手当たり次第に述べるわけにはいかない。すなわち、全体を見通しつつ、テーマに向かって焦点合わせをしていくことになる。特に、象徴的な事柄を解釈する場合に顕著なように、事柄の意味をどのように確定するかは、辞書の一項目を機械的に選んで並べればよいというものではない。

解釈の具体的な方法として、まず、ここで求められるのが構造的解釈である。

構造とは、ひとつの前提的側面から全体を表現するものである。その意味で、全体を因果的に捉えなければならないという現象学的還元から生じた要求に適合する。

個々の事柄の意味は、ひとつの前提的な構造に組み込まれてはじめて意味相互の論理的整合性を生じる。従って、具体的な解釈の場合には、いかなる構造を選択しているかを認識しておく必要がある。真の全体とは、それらの構造相互の連関と統合によって成り立っているものだからである。小論で用いる場所論的解釈は、このような構造的解釈の一端である。

さらに、夢解釈の場合であれば、おもに生理的な背景に基づく夢特有の構造がある。その上で、必要において、物語分析や哲学的解釈学などの構造的 연구를援用することもできる。そのどれを利用するかは、解釈すべき対象が決定することである。このような意味で、「夢十夜」「第三夜」においては、まず、先に述べたように場所の移動とその意味が顕著な特徴として挙げられるので、場所論的考察を導入するのである。

解釈の具体的な方法として、次に求められるのが、述語に基づく解釈である。

現象学的還元から導かれたように、総合的、全体的な解釈をするということは、存在全体から切り取られた枠の中で解釈するというのではなく、常に全体を背景として見通しつつ解釈しなければならないことを意味している。もちろん、かといって、全ての連関を表現することはできない。そこで、解釈すべき主語を焦点としつつ、現象学的還元を現象学的判断中止とも呼ぶように、その主語に勝手な意味を与えることを一時中止し、その主語を取り巻く述語（主語以外のすべてを含む）によって主語がどのように構成されているのかを確認するのである。このことは、後述するように、場所論からも導かれる重要な方法である。

## 2)「夢十夜」「第三夜」における場所の構造

「夢十夜」「第三夜」において、まず状況設定を定めた上で、場所は次のように移動する。

### 1. 状況設定

父親が、六歳の自分の子を背負っている。

いつのまにか子どもの目が不自由になっている。子どもは、そうなったのは昔からだと言答える。その言葉つきはまるで大人。そして、対等である。

### 2. 田圃（たんぼ）

背負った子が「鷺が鳴く」と予言し、その通りに鷺が二声鳴く。

我が子ながら怖くなり、子どもをむこうの大きな森に捨てようとする。すると、子どもは、捨ててしまおうとする親の心を読み、「ふふん」と笑う。

子どもは「今に重くなる」といい、親の自責の念を予言する。

田の中の路は不規則にうねってなかなか思うように出られない。

### 3. 二股の別れ道

小僧（この場面から「子ども」から「小僧」へと表記が変わる）は、見えないにもかか

わらず、石の道標を知っている。石の道標には、「左り日ヶ窪、右堀田原」とある。

それは井守の腹のような真っ赤な字で書かれている。

小僧は、左へ行くよう指示する。それは森の方なので少し躊躇すると、小僧は「遠慮しなくてもいい」と押し進める。

目が不自由なのに何でも知ってるな、と考えていると、背中で、親にまで馬鹿にされるからまずい、といい、さらになにか重大な秘密を知っているかのようにいう。

#### 4. 森の中・杉の根のところ

雨の中、暗くなる路を夢中で歩く。

背中に小さい小僧がくっついていて、「自分の過去、現在、未来を悉く照して、寸分の事実も洩らさない鏡のように光っている」。「しかもそれが自分の子である」、「そうして盲目である」。堪らなくなる。

小僧は、百年前、文化五年の辰年のこんな闇の晩に、この杉の根で、父親がひとりの目の不自由な男を殺し、その男が自分なんだという。

父親が、自分は人殺しだったのだと気付いた途端、背中の子が急に石地蔵のように重くなる。

### 3) 場所論の方法

さて、以上の場所の構造に着目して解釈する場合、場所とはいかなるものかという点が問題になる。小論ではそれを西田幾多郎の場所論をてがかりにして考察する。

西田幾多郎が到達した場所論については筆者はすでに各所で論じてきた<sup>(9)</sup>ので、ここでは、小論の考察に必要と思われる要点を列記する。

a. 西田幾多郎の哲学的場所論における場所とは、哲学の主題としての存在そのものと同義である。従って、唯一、絶対、無限（いかなる区別もない）という性質を持つ<sup>(10)</sup>。

b. 唯一の存在としての場所は、場所自身を自己限定して個、すなわち個別的な事柄を生じる<sup>(11)</sup>。

c. 個は、場所を表現し、場所を豊かにするものとして場所を限定する<sup>(12)</sup>。

d. このような場所と個の相互限定の運動は、無限対有限、絶対対相対、といった相矛盾する運動であるが、その運動によって、場所と個の相互、および個相互の同一性が明らかになり、全体が多様化する。この運動は、現実的には歴史として示される<sup>(13)</sup>。

さて、現象学的還元を端を発した小論の夢解釈の方法と、この場所論の方法とは、以下の点で、論理的連続性がある。

先に、現象学的還元とは、すべての事柄をとりあえず意識の地平に成立している現象として捉えることだと述べた。さらにそこから、事柄を解釈する場合には、すべてを主観的な現象として曖昧にするのではなく、主観が成立するのは存在全体の構成に関わるという事実を重視し、全体に関わる方法としての構造的な解釈を導入することを述べた。場所論の方法はそのひとつである。

これまでのところ、この考察と、a～dは、次のように対応していると考えられる。

a については、結局はすべての事柄を唯一、絶対、無限な地平において成立するものとして捉えなければならないという基本的な事態を意味することと対応する。

b については、そのような絶対的な存在が、現象するひとつの事柄として意識に現われるのであるが、それは、存在それ自体が、存在自身を構成して成立させていると考えることができる。西田幾多郎はこのことを「自覚」という概念によっても説明する。「意識作用

というのは自覚的限定によって考えられたものでなければならない。自覚的限定とは場所が場所自身を限定することである。」と述べるように<sup>(11)</sup>、個々の事柄が成立するのは知るといふ認識に関わることはあるが、それは唯一、絶対、無限な存在としての場所が場所自身を構成し限定することだとされている。そして、先に述べたように、このことを意識して解釈を遂行するとなれば、主語に対する先入観を捨てて、主語を取り巻く述語の構成を考慮しなければならないことになる。

c、dについては、小論で言及する限りでは不十分であるが、フッサール現象学においては、個の個たる在り方を重視することや、歴史的視点から事柄の本質を認識すべきことについてはむしろ常識だといってよい。

さて、小論ではこの方法を場所論的な夢解釈の方法へと、前節の内容に対して具体的に展開することになる。

## 2. 「夢十夜」「第三夜」における場所の構造的解釈

場所論的解釈を行う場合、具体的な空間としての場所を手がかりとすることはいうまでもない。しかし、その意味は物理的な意味だけではない。ひとつの事柄がいかなる意味を持つかを、場所との関係において考察する場合、それが夢ならば、まず、夢特有の場所の現われ方がある。それは、夢の生理的な深まりと並行的に示されると考えられているものである。

先述の「現象学的還元と夢解釈」で述べたように<sup>(15)</sup>、おおむね夢はREM睡眠時に見るとされる。この時期は、眠ってはいいても意識が働いているが、より深いNREM(non-REM)睡眠に入ると、意識は働かなくなる。眠りに伴うこのような生理学的な段階、すなわち、夢を生じる意識作用の段階は、夢の内容に影響することが考えられる。

小論で取り上げようとしている場所論の方法との関連でいえば、眠りの段階は場所の段階として現われるといえる。

この場所の段階を考える場合の目安になる概念が、「退行」と「再統合」である。これらについても筆者はすでに各所で述べてきたが<sup>(16)</sup>、おおむね次のようにまとめることができる。

「退行」とは、「子ども帰り」ともいわれるように、個人の生存における社会生活につきものの意識的、自覚的仮面を取りはずしたり緩やかにすることを意味する。これは、個人の統合性を緩めることになり、それまでの恒常性を失い、混乱し、生命力すなわち「エネルギー」の消耗を招く。反面、個人が自分の殻を破って発達するためには、意識的、自覚的な仮面を外すことも必要である。従って、退行とはまた、発達の契機にもなる。

発達するとは、再び新たな、より生存能力の高い恒常性を手に入れることである。それを、退行し、緩んでいたものが再び統合されるという意味で「再統合」と名づける。退行から再統合に到り得るためには、エネルギーの補充が重要な鍵になる。

すなわち、そのままエネルギーが消耗している状態が続けば、個人は生存の危機に直面することになるが、十分にエネルギーが補充されれば、むしろ高レベルの再統合が得られ、大きな発達が期待されることになる。

ところで、このエネルギーは、量と質の両面から考えることができる。量については、食欲、睡眠など量的に計ることができるエネルギーとして考える側面である。しかし、例えば、量だけの側面からでは計れないものもある。むしろ重要なのは、質の側面である。これは、個人の全体の構成である。肉体の殻に包まれた個人ではなく、無限の存在全体の焦点としての個人を取り巻くすべての事柄が、個人にとって統合的な状態かどうかはその目安となる。従ってこの質の側面には、真の統合を考えることができる知識が重要な要因

となる。

退行と再統合のダイナミズムとテーマの関係は次のように考えられる。先に述べたように、退行とは、発達の契機でもある。つまり、人は発達にとって必要な段階にまで退行する可能性を持つと考えられる。そこで、必要な事柄がテーマとして現われると考えられる。テーマとは、ある有機的存在の恒常性が崩壊している様子であり、ストーリーはそれが新たな恒常性に到る過程である。もちろん、そこですぐに発達に結びついてそのテーマが解決に到る可能性は少ない。従って、必要な退行を得られる段階にまで何度も退行し、そのテーマの解決を図ろうとする。これが、繰り返し見る同じ夢として現われると考えられる。

なお、「退行」「再統合」「エネルギー」に関する以上のダイナミズムは、人間にのみ妥当するだけではなく、自然、生物、社会、組織など、すべての有機体の生存に当てはめて考えることができる。

この「退行」「再統合」と、場所との関係は次のように考えることができる。

これまでの考察から、大まかな目安は、人間の意識的な活動に関わる場所から、無意識的な要因の強い場所へという系列である。後者に近いと退行しているし、その退行している場所から前者に近づくとも再統合する可能性を持つ、と考えればよい。

特に夢の場合には、先に述べたREM睡眠期の中でも、NREM期に近づくとも退行し、そこから覚醒に近づくとも再統合する可能性を持つという、生理学的なダイナミズムと並行的に考えることも必要である。例えば、夢の中で暗い場所から明るい場所に出たという場合でも、特に深い意味はなく、単に外が明るくなって目覚めに近づいたという可能性も考えなければならない。

さて、このような夢解釈の前提から、「第三夜」の場所に着目してみると、全体の流れは退行に向かっていているといえる。

まず、田圃は、人間の意識的な手が加わった自然である。これに対してこれから向かうとする向こうの森は、人間の手があまり加わらない場所であり、この方向性は退行を意味している。

田の中の不規則にうねった路は、より深く退行していくことに対する抵抗、心理的防衛を意味している。これは、先に述べたことから、真のテーマに到ることに対する抵抗や心理的防衛を意味しているといえる。この点については、夢主の複雑な心理が窺えるが、後にテーマとの関係から考察する。

そこで、二股の別れ道に到る。「日ヶ窪」「堀田原」という地名の詳細は、『漱石全集 第十二巻』の注解に記してあるが<sup>(17)</sup>、これまで述べてきたような場所のダイナミズムを考えれば「左」を選んだことに意味がある。

芸術療法における映像表現の左右性の問題は、岡田康伸『箱庭療法の基礎』<sup>(18)</sup>では、でき上がった砂箱表現を左右逆に置いた場合の「ピッタリ」感の有無というテーマで研究され、正位置の方がその反転よりもピッタリするかどうかについては、やや不明瞭な結果が報告されているが、筆者にとって、場所論の立場からむしろ重要だと思われるのは、そこに引用されている、四角の中における各場所の持つ意味を模式化したグリュンワルトの空間図式に見られるような、場所が本来持っているであろう普遍的、象徴的意味である。すなわち、同書の研究は「でき上がった砂箱表現」という主語が、左右逆になってもぴったりくるか、というものであるが、ある対象が左右逆になればそれはそれで別の主語として意味を発揮するために、それなりにぴったりくるはずである。同書の研究はむしろそれを明らかにしたという点で評価できる。

さて、そのようなぴったり感の背後には、表現という主語を支える背景としての述語がある。それこそが、場所が本来持っているであろう普遍的、象徴的意味である。筆者はサンドプレイ（箱庭療法）や絵画療法の体験例から、それをかなり単純化して、次のように

考えている。

まず、左右の問題は、左が無意識的、無自覚的要因が強く、右が意識的、自覚的要因が強い。また、上下は、上が意識的、自覚的要因が強く、下が無意識的、無自覚的要因が強い。そして、左右性と上下性とは、左右性の方が強いダイナミズムを持つ。

従って、方向性としても、左へは、無意識、無自覚、過去、そして、母性、大地性、身体性などへの方向性を意味している。これに対して右へは、意識的、自覚的、未来、そして、父性、論理性、宇宙性などへの方向性を意味している。

四隅については次のように考えられる。なお、括弧内に、参考として『箱庭療法の基礎』に訳出されているグリュンワルトの空間図式に示される意味を併記する。

左上隅は、家庭、出自が示される。(空気、空虚、光・宇宙が流入、憧憬、願望、退縮)。

左下隅は、無意識、可能性、出現してくる未来の契機が示される。(発端 [原初]、生誕 [新生]、根源、水)。

右上隅は、意識、発展、目的、結果、意図的な未来が示される。(火焰、絶頂、目的、終末、死)。

右下隅は、意識無意識を貫く真の現実、本当のテーマ、本音が示される。(物質、地獄 頹廢、悪魔、大地)。

さて、このような視点から「第三夜」の場所を考えるのであるが、二股の別れ道で「左」を選んだのは、まずは、無意識の方向を選んだと考えられる。いいかえればその方向性は、より深い退行へと至る方向性である。さらにそれは、母性や過去、大地性という方向性でもある。これらがやがてどのような意味を持つかは後に考察するとして、ここでは、背中の子供が無意識の方向を選ばせたことに着目しておく。

夢主にとって背負った子供が左を選ばせたという意識は強い。表現も「子供」から「小僧」へと代わり、ここで夢を遂行する主人公が逆転しているのである。もちろん、現象学的還元を顧みれば、この小僧も、夢主自身の一側面である。生理的構造からいえば、夢主自身が夢の深まりとともに退行しているのであるが、退行を促す主体を他者に委ねようとしている。これは、一種の防衛反応である。すなわち、夢主にとって退行することで露わになる不都合なことや、隠しておきたいことに対する抵抗である。しかし、夢主にとっては、この夢を見ていることそれ自体が自分にとって必要なことであるから、事態は当然退行へと進行する。

分かれ道の風景の中でくっきり見えるのは、道標の「井守の腹のような真っ赤な字」である。それは、直接的には、明らかになってくる凄惨な事件の血の色である。これは、すでに退行の先のテーマを暗示し、繋いでいる。なお、この血の色は、後述するように、この親と子が、一個人としての夢主自身の内面という、論理的宿命的に逃れられない血脈を持っているその葛藤がテーマだということを暗示していることも付記しておく。

その内容が、いよいよ森の中で明らかになる。

森の中で露わになったことは、先にも述べたように、百年前、文化五年の辰年のこんな闇の晩に、この杉の根で、父親がひとりの目の不自由な男を殺し、その男が背中の小僧なのだということである。このような荒唐無稽な内容を夢主は素直に受け止めている。ということは、この内容は夢主にとって当然の意味を持つテーマだということになる。

場所の意味を考えれば、森は、無意識の象徴であり、その中のランドマークともおぼしき杉の根元は、無意識の心奥である。したがってそこでは、この夢のテーマ、すなわち、この夢を見なければならなかった真の理由が明らかになる。

その理由とは何だろうか。

場所の意味と場所の移動の方向性の意味に着目したこれまでの考察から、この最後の場面の内容を厳密に解釈することで、この夢の真実が明らかになることが推測される。



### 3. 「夢十夜」「第三夜」における夢のテーマ

「夢十夜」「第三夜」の最後に到達した場所、森の中の杉の根元で判明したことは、夢主が百年前にそこで目の不自由な男を殺し、その男が今背負っている自分の子供だという事実であった。

従ってまず、起こったことは殺人である。

夢や芸術表現において、死は、決して悪い意味ばかりではない。それは「死と再生」という一連のテーマに繋がるからである。

「死と再生」は、具体的な例としては、何かが死に、何かが生まれるというセットであられる。小説の末尾に、主人公の死とともに、その子の誕生が描かれていればそれは典型的な「死と再生」のテーマだといえる。「死」は分りやすい死の姿ではなく、木が枯れる、町が崩壊するなど、象徴的に示される場合もある。「再生」も必ずしも同じ種類のものが再生するとは限らない。ミッチェルの『風とともに去りぬ』の最後に、すべてを失った主人公が、故郷を自覚するというのも、死と再生のひとつの現われである。少なくとも主人公と読み手の心理には、何かが終わって新たな何かが生まれているからである。

このように「死と再生」は、一言でいえば、発達を意味する。すなわち、死とは何かが終わったことを意味し、再生は、なにか新しいことが始まったことを意味すると考えられる。もちろん、「死と再生」がスムーズに進展するためには適切なエネルギーを必要とする。

このように、死は必ずしも悪い意味ではなく、むしろ発達の契機だから、良いもののはずであるが、実際には、死にまつわる夢や表現に対しては恐怖や不安を感じる。この夢の場合も、父親が、自分は人殺しだったのだと気付いた途端、背中の子が急に石地藏のように重くなる、というように、自責の念に襲われたりもする。これら否定的な反応については次のように考えられる。

一般にある事柄に恐怖や嫌悪といった否定的な感情を持つ場合には、ふたつの相反する理由が考えられる。

ひとつは、それが生存に反するものの場合である。この夢の場合、死はたしかに生存に反するものであるから、否定的な感情を喚起するといえる。

いまひとつは、それが生存に役立つものでありながら、自分の現状からはまだ遠い場合である。この夢の場合、死と再生という一連の発達の契機に達していながら、いまだ現状からは程遠く、それゆえに死という事実の恐怖のみが表面化していると考えられる。

このことをもう少し追求しようとすれば、死んだのは誰なのかという問題が浮上してくる。そして、それを考えるためには、先に述べたようにこの作品に即して、死んだもの、目の不自由な男、子供、小僧の述語をたどり、その性格を確認しなければならない。物語は場所とともに退行に向かっているのだから、先の1～4を参照しつつ、それに従って改めて確認する。

これまで述べてきたように、場所の移動は退行の進展であり、それは、テーマを露わにする方向性を持つものであった。従って、述語性に着目した各項目に対してもこのような方向性を意図しつつ解釈しなければならない。

はじめに呼び名である。当初は、「子供」と表記されていたものが、二股の別れ道からは「小僧」が主流になる。それでも、森の中において、「自分の子」「背中の子」というように、親との関係において述べられる時には「子」という表記が用いられている。このことは、「小僧」という自立的な存在に対する気持ちと、自分の子という血族的関係の中でとまどっていることを意味していると考えられる。

そのつもりで、モチーフ場面、すなわち状況設定場面に着目すると、「慥に自分の子」「言葉つきは丸で大人」「しかも対等」と、すでにこのとまどいが提起されていることに気づく。また背負っている子の年齢は「六歳」とされているが、小学校入学のこの年齢は、背負うよりはもう自分で歩かせなければならない時期でもある。

自分の子供であるとともに、それが対等な自立的存在でもあること、これは、現実的な親の場面を考えれば、ごく常識的な感情である。子供というものは、当初は親を絶対的な存在として捉えつつ成長し、成長してしまえば、対等になり、さらには親の知らないことをも知り追い越して行くべきものである。この夢の場合も、ひとつのテーマとして、このような親と子の成長発達に伴う関係の変化、そして漱石自身が親として経験し社会的に経験した現実的な意味での子の成長発達に伴う親子関係の変化に対する葛藤が含まれていることは明らかである。

さらにとりあえずは、田圃以降の展開も、この延長として考えることができる。子供は成長するに従って、親の知らないことを言い当てたり、捨ててしまおうという、すなわち、自立させてやろうとする親の心を読んだりする。死と再生ということを経験に入れれば、象徴的には、親は子どもを見捨て、その子ども性を殺すことによって発達させるという表現もできるであろう。

すなわちはじめに指摘できるのは、この夢には、このような親子の双方の成長発達に伴う常識的な葛藤がテーマの底に流れているということである。

そこにさらに関わってくるのが、全体を流れる神秘性や不気味さである。この神秘性や不気味さはこれまでの考察の連続性として、親子双方の成長発達にともなう感情としても捉えられる。特に、この不気味さという否定的感情は、先に述べたことから、夢主自身の成長にとって、まだ自覚せず、遠いことのように思われるための感情だともいえる。

しかしそのうえで、百年前のエピソードの必然性はどのように考えればよいだろうか。このエピソードが漱石のどのような個人的体験に基づくかについては、先述の『夏目漱石―「夢十夜」論ほか―』や『『夢十夜』試論―第三夜の背景―』に述べられるような、江戸後期から明治初期に至る芸術活動の風潮が最も直接的なものだと考えるのが妥当であろう。従って、まず当面、それが最も近い必然性である。

そのうえでさらに、より深奥の必然性を、退行の極、すなわち無意識の最深奥という場所構造における意味から、元型的な意味との関連で考えることができる。ただし、これまでも述べてきたが、以下のような元型的意味づけは、一般化してそれを結論としてはならない。とりあえず一般的な意味として解釈したうえで、後述するような、個としての夢主の現実的な生育史と重ねるなどの具体的検証を伴わなければ、個人が消滅するからである。

殺人についてはこれまで述べてきた通りだが、「目の不自由な男」とはどのように考えればよいのだろうか。この事件が起こったのは、場所構造的には無意識の最深奥であり、しかも、夢主が生まれる以前の過去ということで、ひとつには元型的意味として捉えることができる。

筆者はこの「元型」という語を、河合隼雄、林道義などに倣って<sup>(19)</sup>、ユング心理学の用語“Archetypus”の訳として用いる。

ユングはこの“Archetypus”を当初「原像 (das urtümliche Bild)」とも呼ぶが、その特徴は「常に集合的(kollektiv)」と述べられ、また、その成立について「記憶の沈殿物」「生理学的、解剖学的に規定された素質の心的表現」などと述べられるように<sup>(20)</sup>、時間空間を超え、個々に所属する意識の深層において共通な性格を持つ。

では、「目の不自由な男」(＝子供)は、どのような元型的意味として述べられているのだろうか。

考察の方法としては、ここで象徴に関する事典を参照すれば一応の答は出ることになる

が、その方法は数多くの意味の中に埋没させる危険性をも孕む。ここでは、先に、述語性によって考察すべきとしたことを導入し、同時に元型的意味を求めることにする。

「目の不自由な男」(＝子供)を主語として、その述語性に着目すると、二つの特徴が明らかになる。

ひとつは、人間の能力を超えた知を持つ、ということである。父親の心を読み、鷺が鳴くことを予言し、百年前の殺人を知っているのである。このことは、一般的に、また、歴史的に、目の不自由な人が、目の見える人よりも、真実や未来を知りうる能力において優れているといわれていることとも重なる。確かに、目が不自由ということ以外にも、なんらかの点で不自由であるということが、それ以外の能力を鋭くまた繊細に発達させることは常識であろう。

いまひとつは、当然ながら、「背負われている子供」だということである。

そして、この二つが合体している元型について、一例として、Adde Vries “Dictionary of Symbols and Imagery”を参照すると、[child]の項に、「神秘的な子ども(the mystic child)は、智慧を授け(例えばイエスが福音書記録者にしたように)、謎を解き、地下の、もしくは、心理的な怪物から、世界を解放する。」とされている<sup>(21)</sup>。

この定義は、この「目の不自由な男」の解釈にひとつの示唆を与える。

場所の段階としては、最深奥に退行している場面では、殺された男は必ずしも子供ではない。しかし、その少し浅い、現実に近い層までは子供なのである。

小論の始めに現象学的還元から述べ始めたことを顧みて、かつ元型的な発想をすれば、この矛盾は難なく解決できる。

すなわち、殺された男は、夢主の意識に生じた像のひとつである。それが子供として登場したのだから、それは、夢主自身における「子ども性」とでもいうものである。それは、元型的なまでに神秘的な子どもなのだから、夢主自身にとってまだ遠い存在であり、従って、不気味な感じを与えるのである。遠い存在といえる理由は、先の、“Dictionary of Symbols and Imagery”の、神秘的な子どもについての説明では、むしろ、新たな可能性の感じを与えるのに、同じように、「智慧を授け」「謎を解く」ことが、この夢では不気味な印象を与えているからである。

そしてこのことは同時に、この夢が、本当は自覚されない新たな可能性でもあることを意味していることになる。夢において、なんらかの怪物から世界を解放することは、夢主にとって癒しであり、成長発達でもある。

ということになれば、死んだ男は大人のように、背中にいるのは子供だという理由が明らかになる。すなわち、死んだ男は、夢主の過去であり、子供は夢主の可能性である。

そして、不気味な印象は、夢主の過去が本当には死にきっていないことを意味する。すなわち、夢主が、成長発達できず、現実的意識的に新たな未来に向かって出発できないでいるということが示唆される。

さて、夢主は、この夢の中では、親を演じている。それは、現象学的還元から派生してきた、すべてを夢主の心像だという考え方からいえば、夢主自身における「親らしさ」つまり「親性」である。これに対して背負っている子供は「子ども性」である。

「親性」からいえば、「子ども性」は、不気味で不安な存在である。それは、自分の内部が成長発達するためには、自分のより未熟な側面を見捨て忘れなければならないのに、それをまだ完全には遂行できないでいることを知っているから不気味なのである。

ここでこの夢の、もうひとつのテーマが現われてくる。

それは、先に述べた現実的な親子関係につきものの葛藤に対して、それと関連しながらも、自分自身の内面における「親的な側面」すなわち「親性」と、「子どもの側面」すなわち「子ども性」との葛藤もしくは対決である。

この物語に即していえば、「親性」は親としての優位を保ちたいと意識するような現われ方をしている。しかし、注意してみるとこの親は、親としての行動は背負うこと以外には何もせず、ひたすら子どもを捨てようと森へ急ぐ。他の様々な親らしさすなわち「親性」が現実的な親には限りなく指摘されるだろうが、この夢において選ばれたのは、捨てるという行為である。これは明らかに、テーマを象徴している。そして、この捨てるという行為が、ひとつの主体における「親性」と「子ども性」との間に起こったことだとすれば、すなわち、ひとつの主体の行為だとすれば、それは「子どもの自立」という行為にほかならない。

夢主、つまり一個の人格は、その内面に、「親性」を持っている。それは、自らが成長し自立するために、自らの「子ども性」を捨てていかなければならないということを知っている。その捨てるという行為は、自分の過去を抹殺することでもある。

他方、一個の人格における「子ども性」の側からも、子ども性自身を捨てなければならないということは分っている。この夢の場合も、むしろ子どもが、無意識への退行を指し示すのである。さらに、一個人における「子ども性」もまた、「親性」よりも、未来への発展可能性を持っている。それゆえに、「神秘的な子ども」に顕著のように、その可能性を目的論的に延長すれば無限の知識や超越的な知識に連なることになるが、この点でも親性は、子ども性に対して反発し、抹殺しようとする。夢主という主体が未発達であればあるほど、この反発と抹殺は、夢主自身にとって、強く、かつ、不気味に現われることになる。

かくして、夢主自身は、自らの未発達さゆえに、夢においてさえ「親性と子ども性のせめぎあい」すなわち「親性と子ども性の対決」に苛まれることになる。

そして、この夢の深層にあるこのような「親性と子ども性のせめぎあい」すなわち「親性と子ども性の対決」は、先に述べた、現実的な親と子のそれぞれの成長発達に伴う変化というテーマと、夢主の意識の上で重なることは明らかである。現実には親は子に、子は親に自分の可能性を投影し、その現実との差異に葛藤するが、それは、最終的には、本人の意識における現象である。

かくして、「夢十夜」「第三夜」を夢として解釈する試みから、これまで述べてきたような意味での「親性と子ども性のせめぎあい」すなわち「親性と子ども性の対決」というテーマに至ったが、それがなぜ起こったのかという点について言及しなければならない。

そのうち、最も深層において指摘すべきは、人格の成長発達本能によるものだといわなければならない。

エリクソンは、人格発達の内的法則を前提として、発達に伴うライフステージの各段階で出会うべき危機やその克服の典型を詳説するが、その前提として「成長するものはすべて予定表(ground plan)を持っており、この予定表から各部分が発生し、各部分はそれぞれの特に優勢な時期を持つが、それはすべての部分が一つの機能的全体(functioning whole)へと至るまで続く」<sup>(22)</sup>と述べられるように、いわば無限の完成を目指す成長発達本能があることを述べる。小論の夢解釈においても、このような成長発達本能を前提として遂行してきた。

それに同時に重なってくるのが、これまで述べてきたような「親性と子ども性とのせめぎあい」すなわち「親性と子ども性の対決」という元型的あり方である。すでに述べたように、これは、本来すべての人格の深層に横たわり、条件さえ整えばいつでも姿を表そうとする型とでもいうものである。

従って、夢主自身がそれを特定の夢で露わにするには、夢主自身の個人的条件が反映されているはずである。

もちろん、その個人的条件のひとつには、直接的に影響を受けたであろう芸術的風潮がある。ちなみに、先述の元型的考察は、これら芸術的風潮が江戸末期から明治初期という

時期に起こったことに対しても、ひとつの視点を提供することができる。それは、まさにその時代が、価値観の激変期に当たり、本質的に「親性と子ども性のせめぎあい」すなわち「親性と子ども性の対決」が激しい時期だったのではないか、という視点である。これは、漱石自身に関係することでもあり、詳細な考察を要するものであるが、限られた紙幅の小論では問題提起にとどめて割愛する。

さらに考察すべき個人的条件は、漱石自身の個人的事情である。それは、二つに分けられる。ひとつは、漱石がこの小説を書いた時期の問題であり、もうひとつは、漱石の生育史の問題である。これらの問題は、いかに漱石が時代の芸術的風潮の影響を受けてこの作品を創作したとしても、創作の因果性からいえば、より作品に密着しているはずである。

そしてこの点は、先に述べたように、一般的な夢解釈においても避けては通れない事柄である。紙数の限られた小論ではその点に詳細に触れる余裕はないが、小論の考察を検証するためにも、文学研究の一端を纏めておく。

#### 4. 「夢十夜」「第三夜」と夏目漱石

まず、漱石がこの作品を書いた時期の状況についてであるが、「夢十夜」は、明治41年、漱石41歳の時に書かれた。その前後の事情は多くの研究者によって触れられているが、一例として小宮豊隆『夏目漱石』に記録されている内容から、小論に関わるひとつの典型的な事実を確認しておく。

このころ漱石の身の上で起こった最大の変化は、東京帝国大学および第一高等学校の教官を辞して、朝日新聞社に入社したということだといえる。『夏目漱石』では、明治28年の「愚見数則」<sup>(23)</sup>や、「明治30年4月23日、正岡子規宛て書簡」<sup>(24)</sup>などを引用して、漱石が自らを教師に向いていないと感じ、文学三昧に生きたいと考え、自らの本職とは何かと悩み、さらには神経症にさえなりかかっていたことが述べられている<sup>(25)</sup>。従って、良い職さえあればいつでも転職したいと思いつつ過ごしていたようである。しかし、もちろん生活を考えれば簡単にはいかず、明治39年ころから報知新聞社や読売新聞社から就職の依頼が来るが、迷ったあげく断っている。そして、結局決定したのが明治40年の朝日新聞社入社であった。朝日新聞社側の意気込みと、これと対比的な漱石の迷いについては『夏目漱石』に経緯が記してあるが<sup>(26)</sup>、小論のテーマと特に結びつくのは、この深刻な迷いである。

この場合の迷いは新しい変化に対する迷いである。その変化は、結果的には「文芸の哲學的基礎」<sup>(27)</sup>に見られるような、自己の主張と発展を生き生きと述べ始めるような好転をもたらしたのではあるが、神経質な漱石は変化に順応するのではなく、次々に起こる新しい事態や、矢継ぎ早の執筆依頼に表面上は対応しつつ、内面は葛藤していたようである。「夢十夜」の直前に書いた「文鳥」<sup>(28)</sup>には、書斎でペンを淋しく走らせるという記述が繰り返し出てくるし、執筆やその他の多忙事、おそらくは弟子、森田草平と平塚雷鳥との駆け落ち事件、いわゆる「煤煙」事件の後始末などで、結局文鳥を死なせてしまう結末などは、当時の心中を暗示しているといえる。

いうまでもなく、この変化は、「死と再生」のテーマである。しかも、完全には再生し切れないまま推移している。自らの中に生まれようとする新しい要素としての「子ども性」の可能性に期待しつつも、それまでの価値観としての「親性」は「子ども性」の未知的な内容に戸惑い恐怖するのである。

次に、漱石の生育史の問題である。

この点について研究史的には、冒頭にも言及した荒正人「漱石の暗い部分」が一つの角

度からの解釈として特徴づけられる。この評論では、目の不自由な子供を、生理的に去勢されてしまっている父親とみて、それを、漱石が父親 54 歳の時の子どもだという事実や、漱石が父親を憎み母親を愛したという事実、そして、漱石が実父晩年の末子であることから誕生と同時に里子に出され、二歳で別の養父母の許にやられ、十歳で実父実母の家に二人が祖父母と教えこまれて戻り、やがて真実を知るという経歴などによって、フロイト的精神分析でいうエディプスコンプレックスに相当するという主張が述べられている<sup>(29)</sup>。

漱石の生育史にまつわる事実はまさにその通りであろうし、それがエディプスコンプレックスに結びつくこともあり得ることだが、それをすぐさまこの「第三夜」に適用するのは、小論でこれまで述べてきた方法論からもやや短絡的な感が否めない。ほんの一例であるが、表現そのものを重視し、述語性に着目して考察すれば、記されている「子供」の必然性を重視すべきである。すなわち先に述べたように、「背の子供」はやはりまずは「子ども」の意味を担い、それが叙述に従って目の不自由な男の意味をも担っていると、作品に沿って考えるのが常識的だと思われる。そこから、エディプスコンプレックスにまで引きつけるのはやや因果性に飛躍がある。

その上で、この漱石の原点ともいえる生育史は、小論のこれまでの考察にひとつの論拠を与えることになる。すなわち、小論の考察から到達したひとつの仮説として、先に「親性と子ども性とのせめぎあい」すなわち「親性と子ども性の対決」が現われる理由は、本質的に未発達だからと述べたが、漱石のこの生育史からは、特に父親に対する信頼感が育たなかった経歴や、同時に漱石自身が内面的な「親性」を育て確認する基準を、原初的に得る機会を失っていたことを意味する。その場合、成長発達本能によって生じてくる自らの可能性としての「子ども性」に対してはひたすら不気味なものとしてしか対処できないのである。

現実的な資料による考察は、さらに展開しなければならないが、このように、人格発達に伴う元型的な認識形態に、このような生育史が重なり、時代的な芸術風潮が重なり、さらに当面の自己の環境と心身の変化に対する戸惑いなどから、この夢が形成されたと考えられる。

かくして小論は「第三夜」を夢として捉えた場合、どれほどのことがいえるかを論じてきたが、冒頭でも述べたように、小論に続いて、このような視点から漱石の創作活動を検証すること、それが今後の課題であることはいうまでもない。

## 註

- (1) 笹淵友一『夏目漱石 ―「夢十夜」論ほか―』明治書院、昭和 61 年、p. 63.
- (2) 『夏目漱石 ―「夢十夜」論ほか―』p. 7.
- (3) 相原和邦『「夢十夜」試論 ―第三夜の背景―』『日本文学研究資料叢書 夏目漱石Ⅱ』有精堂出版、1982 年/1989 年、pp. 165-175.
- (4) 「明治 38 年 1 月 15 日、野間真綱宛て書簡」『漱石全集 第二十二巻』岩波書店、1996 年、p. 353.
- (5) 『夏目漱石 ―「夢十夜」論ほか―』p. 62.
- (6) 「夢十夜」『漱石全集 第十二巻』岩波書店、1994 年、p. 106.
- (7) 荒木正見「現象学的還元と夢解釈」(『福岡女学院大学紀要 第 10 号』、2000 年、pp. 1-24).
- (8) Edmund Husserl, “Die Idee der Phänomenologie –5 Vorlesungen–”, Herausgegeben

und Eingeleitet von Walter Biemel, Martinus Nijhoff, 1973, S. 6.

(9) 荒木正見「西田幾多郎の場所論とヘーゲル弁証法」、『福岡女学院大学紀要 第4号』1994年、pp. 49-70.

荒木正見「ヘーゲルと西田幾多郎における自然・歴史と存在」、『人文学研究 第2輯』福岡女学院大学人文学研究所紀要、1999年、pp. 1-29.

荒木正見「場所論の展開と風景論の試み」、井上義彦・波多江忠彦・荒木正見共編『人間、何処からどこへー哲学の試みー』ナカニシヤ出版、1998年、pp. 165-188.

荒木正見「西田幾多郎の場所論と方法論的展開」、荒木正見、徳永哲『場所論と人間行動ー演劇・ドラマ・教育相談ー』中川書店、2000年、pp. 3-48. など.

(10) 「場所」大正15年、『西田幾多郎全集 第四巻』岩波書店、1949年/1988年、pp. 208-209.

(11) 「無の自覚的限定」昭和7年、『西田幾多郎全集 第六巻』岩波書店、1948年/1988年、pp. 208-209.

(12) 「現実の世界の論理的構造」昭和8年、『西田幾多郎全集 第十四巻』岩波書店、1951年/1988年、p. 470.

(13) 「哲学の根本問題」昭和8年、『西田幾多郎全集 第七巻』岩波書店、1949年/1988年、p. 191.

(14) 「無の自覚的限定」『西田幾多郎全集 第六巻』pp. 96-97.

(15) 『福岡女学院大学紀要 第10号』p. 8.

(16) 例えば、荒木正見『現象としての人格発達』中川書店、1992年、pp. 50-57、『福岡女学院大学紀要 第10号』pp. 8-9 など.

(17) 『漱石全集 第十二巻』p. 652.

(18) 岡田康伸『箱庭療法の基礎』誠信書房、1984年/1985年、pp. 141-158.

(19) 河合隼雄『ユング心理学入門』培風館、1967年.

C. G. ユング／林道義訳『元型論 無意識の構造』紀伊國屋書店、1982年. など.

(20) “C.G. Jung Gesammelte Werke Sechster Band, Psychologische Typen”, Walter-Verlag, S. 453.

(21) Ad de Vries, “Dictionary of Symbols and Imagery”, North-Holland Publishing Company, p. 96.

(22) Erik H. Erikson, “Identity and the Life Cycle”, W.W. Norton & Company, 1959/1980, p. 53.

(23) 「愚見数則」『漱石全集 第十六巻』岩波書店、1995年、pp. 3-9.

(24) 「明治30年4月23日、正岡子規宛て書簡」『漱石全集 第二十二巻』pp. 122-124.

(25) 小宮豊隆『夏目漱石』中、岩波文庫、1987年/1999年、pp. 251-268.

(26) 『夏目漱石』中、pp. 269-282.

(27) 「文芸の哲学的基礎」『漱石全集 第十六巻』pp. 64-137.

(28) 「文鳥」『漱石全集 第十二巻』pp. 79-98.

(29) 荒正人「漱石の暗い部分」坂本育雄編『夏目漱石『夢十夜』作品論集成 I』大空社、1996年、pp. 143-145.

[confrontation between parenthood and childhood on ‘third dream’ in “Yume-Juh’ya” by Natsume, Sohseki –interpretation of dream concerning meaning of field–]

(Masami Araki・福岡女学院大学人文学部教授)